



ユニバーシティを目指して

大学の地平をひらく

昨年11月のことです。本センターでは「ハーバード・ホライズンズ」の創設者にセミナーをお願いしました。「ハーバード・ホライズンズ」はハーバード大学大学院における取り組みで、研究面で卓越した大学院生に数週間にわたるプレゼンテーションスキル特訓を授け、その成果をカンファレンスで公開するというものです。

大学らしさを求めて

名古屋大学にも、専門分野の壁を越えようとする取り組みがありました。その一つが教員有志による名大サロンです。さまざまな分野の研究報告を肴に、ワイングラスを傾ける、月一回の「夜凜の会」です。市民にも開かれた取り組みでしたが、学部や研究室の間にある壁を少しでも薄くしたいという試みでもあったと聞いています。私は数回参加した程度でしたが、名古屋大学はこんな大学らしい取り組みができる場所なのだと思いつき、任早々に感心したことを覚えています。

大学らしい、とサラリと書いてみましたが、実際のところ「大学らしさ」は大学によって、人によって、様々であることでしょう。研究所を経て大学

に就職した私にとっての「大学らしさ」は、幅広い研究分野のそれぞれに卓越した人々がいて、そこで学ぶ学生がいて、皆が自由に交流するイメージでした。その中から新しいアイデアや問題意識が芽生え、次なる展開へ……という、かなり理想的なサイクルを思い描いていたように思います。加えて、市民と場を共有していることにも新鮮さがありました。これは私がサイエンスコミュニケーションを研究テーマの一つとしていたことあるでしょうか。

そんな名大サロンは2010年12月、第100回をもって閉幕してしまいました。月一回の開催準備にかかる手間ひま、参加者の固定化、ジェネレーションギャップなど、背景にはさまざまな苦勞があったようです。しかし、8年の時を経て、名大サロンは復活することになりました。昨秋から2ヶ月に一度のペースで再開されています。

名大サロンがお休みの間に、大学と社会、研究者と市民の交流チャンネルは豊かになりました。一方、学内の異分野交流は、ごく一部のプロジェクトを除けば、低調だったように思います。異なる分野の教員が集まる主な機会といえば、会議。各分野の個別事情を超えてなんとか大学を運営しなければという方向は共有できても、違いを楽しみ、新しい可能性にワクワクするような経験は少なかったのではないのでしょうか。

ユニバーシティの語源を探ると、「一つに」「向けられた」というラテン語に辿りつきます。学問という一つの目的のもとに、国籍も階級も異なる者たちが集った場所。それが現代に引きつづく大学の起源であることは、折に触れて学生たちに伝えたいところです。その際には、専門分野を異にしながらいつの場を共有し、刺激しあっている教職員の姿を示すことも同時に大切になるでしょう。

大学改革に疲弊感のつる今だからこそ、学内外の様々な人と交流できる場に関わり、「大学らしさ」に思いを馳せる時間を大切にできたらと思います。

（齋藤芳子）

今こそ楽しみたい

今こそ楽しみたい

原点回帰

原点回帰

ユニバーシティの語源を探ると、「一つに」「向けられた」というラテン語に辿りつきます。学問という一つの目的のもとに、国籍も階級も異なる者たちが集った場所。それが現代に引きつづく大学の起源であることは、折に触れて学生たちに伝えたいところです。その際には、専門分野を異にしながらいつの場を共有し、刺激しあっている教職員の姿を示すことも同時に大切になるでしょう。

大学改革に疲弊感のつる今だからこそ、学内外の様々な人と交流できる場に関わり、「大学らしさ」に思いを馳せる時間を大切にできたらと思います。

（齋藤芳子）

今こそ楽しみたい

今こそ楽しみたい

今こそ楽しみたい

今こそ楽しみたい

今こそ楽しみたい

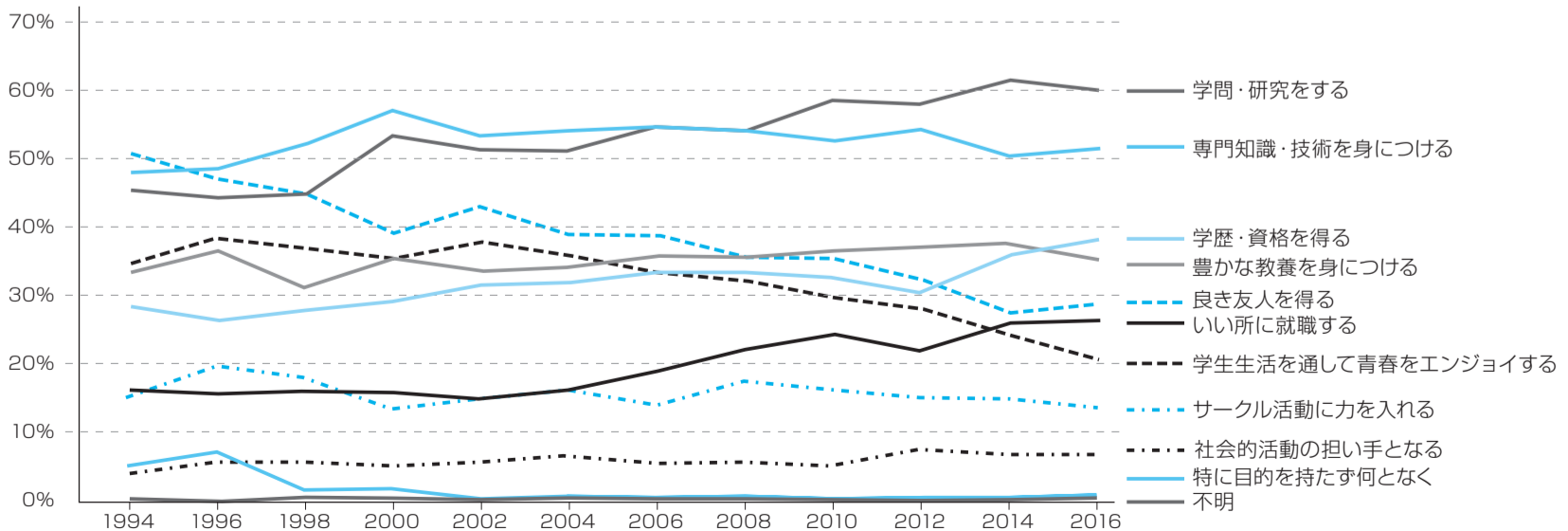
今こそ楽しみたい

グラフで見る名大生 「大学生生活の目的は、20年間でどう変わったか（学部学生）」

このコーナーでは、名古屋大学が学生調査などで集めたデータをもとに、名大生の意識や生活、教育や学習活動の動向を知るための情報を、わかりやすいグラフの形で紹介していきます。

第1回目は「大学生生活の目的」です。下のグラフは、「大学生生活の目的をどのように考えていますか」（10項目から主なものを3つ選択）との質問に対する名大学部学生の回答を、1994年から2016年にかけて比較したものです。

20年前と比べると、「学問・研究をする」「学歴・資格を得る」「いい所に就職する」を選ぶ学部学生が増えています。他方、「良き友人を得る」「青春をエンジョイする」を選ぶ学部学生は減少傾向にあるようです。（丸山和昭）



【データ】 各年度の『学生生活状況調査報告書』を参照。名古屋大学の学生生活状況調査は、ほぼ隔年で実施。調査対象は無作為に抽出した5分の1の学生（ただし、外国人留学生、休学及び留学中の者は除く）。上記のグラフでは、学部学生のみを使用。

かわらばんへの皆さまの「意見・感想」をお寄せください
Eメールアドレス info@cshe.nagoya-u.ac.jp

Higher Education Glossary

—— 高等教育にまつわる用語集 ——

責任ある研究・イノベーション

Responsible Research and Innovation

公的資金に基づいて行われた研究のデータのねつ造や論文盗用といった研究不正問題、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故を契機とする科学者の責任問題、基礎研究を含めて両義性のある研究開発にどのように携わるべきかという、デュアルユース問題など、近年、科学と社会との接点において研究者の責任が問われる場面が見られます。このような文脈において、「責任ある研究・イノベーション（以下RRIと記す）」という考え方が注目されるようになりました。

RRIは、研究・イノベーションに対する社会からの期待を踏まえ、社会に及ぼす影響を予測・評価しながら行われる研究・イノベーション活動のことです。その特徴は、研究・イノベーションを正負両面から捉えることや、活動の早い段階から研究者のみならず多様なステークホルダーがそのプロセスに参画することだと言われています。

大学における取り組みの一つは、所属研究者のRRI支援です。ただし日本では「多様なステークホルダーの参画」以前に、研究倫理や公正研究すらおぼつかない状況にあります。そのため、各大学では研究倫理に関する規程や綱領の制定、またそれに関連する内部組織の立ち上げなどが行われています。大学は、この研究倫理に関する課題を乗り越えることに加えて、社会により開かれた研究活動に向けた所属研究者のRRI支援を行なっていく必要があるでしょう。

大学におけるもう一つの取り組みがRRI教育です。ヨーロッパではHORIZON2020という科学技術政策のもと、「高等教育機関と責任ある研究イノベーション（HEIRRI）」プロジェクトが高等教育機関向けの教育プログラムを提供しています。機関レベルでは、オランダのライデン大学とデルフト工科大学、エラスムス大学ロッテルダムが共同して実施する「責任あるイノベーション」という学部生向けのプログラムが有名です。日本の研究・イノベーション活動において多様なステークホルダーの参画を進めるために、科学技術とは直接関わらない学部学生に対しても、共通教育等を通してRRI教育を行うことが大学には期待されていると言えるでしょう。（東岡達也）

「大学教育改革フォーラム in東海2019」を開催します

日時：2019年3月9日（土）10:00～16:45（受付9:30～）

会場：名城大学名古屋ドーム前キャンパス南館

参加費：1,000円（昼食付2,000円）／学生無料（昼食付1,000円）

参加申込：https://sites.google.com/view/tokaiforum2019/home/sanka_poster

〈プログラム〉

10:00-11:30

基調講演：中井 俊樹氏（愛媛大学 教育学生支援機構・教授）

「今、大学の組織力が問われる～教育の質保証と教職員の能力開発」

13:00-14:45

分科会第I部

1. 学生支援

発達障害及びその特性のある学生への支援体制に関する現状と課題（第2弾）
—理解と支援—

2. アクティブラーニングと学修成果の見える化

主体的・対話的で深いよりよい学びのために

3. 危機管理

いま、なぜ防災か—防災教育を通じて、学生とともに考える自主防災—

特別企画：若手教職員

若手教職員のための今さら聞けない○○

15:00-16:45

分科会第II部

4. 高大接続

入試改革への取組事例と高校現場から見た高大接続

5. 社会人の学び直し/リカレント教育

地域市民の学び直しの現状を知る—大学にできることはなにか—

6. IR

教学IRを教職協働の視点から考える

—より円滑にIRによるPDCAを進めるには—

7. 組織マネジメント

実務の視点からみた大学改革の現状と課題

—ミドルキーパーソン（大学改革の推進役を担う実務担当者）の果たす役割とは—

詳しいプログラムについては下記サイトをご覧ください。

<https://sites.google.com/view/tokaiforum2019/>

情報配信サービスへのご登録はお済みですか？

高等教育研究センターによる各種セミナーや新刊などの情報をメールでお知らせするサービスを行っております。情報配信サービスへのご登録をご希望の方は、下記ウェブサイトよりお申込ください。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/info_form/

読んでおきたい

この1冊



Great Books on University

『国立大学職員の人事システム』

渡辺恵子 著

東信堂 2018年

本書の主な目的は、国立大学の事務職員の昇進構造と能力開発の実態を解明することです。大学職員の人事管理、とくに昇進と能力開発について実態を具体的に明らかにし、法人化前後でそれらの状況がいかに変容したかを明らかにしています。文部科学省職員や複数国立大学での管理職等の経歴で培った問題意識を背景に、インタビューや各種資料等

の豊富なデータを駆使しています。

第1章で国立大学と文部省の組織を概観した後、第2章で国立大学事務局幹部職員の昇進構造がいかに構築され、いかなる人事配置をもたらしたかを検討しています。第3章では法人化以前の職員の職務遂行能力とその開発の実態に、第4章では事務局幹部職員の昇進構造と能力開発が法人化後にいか

に変容したかの解明に、迫っています。これらの分析をふまえて、終章では結論と含意が展開されます。国立大学職員には選抜を経て本省転任というファスト・トラックや、その後の国立大学の部課長経験を通じて職務遂行能力を形成・向上させる仕組みがあります。その内容を具体的に指摘しています。

国立大学の運営をめぐることは、学長を中心とする執行部の役割が注目されています。その一方で、大学幹部職員は、大学組織の諸決定の実施等に重要な役割を担っているにもかかわらず、注目度は高いとは言えません。国立大学の運営メカニズムを解明するうえで、本書の提供する知見は貴重であり、これに続く本格的な研究が期待されます。（夏目達也）

高等教育研究センタースタッフ（2019年1月現在）

センター長 齋藤 文俊 専門領域：日本語学

教授 夏目 達也 専門領域：高等教育学、技術・職業教育論

准教授 中島 英博 専門領域：高等教育マネジメント

准教授 丸山 和昭 専門領域：教育社会学、高等教育論、専門職論

助教 齋藤 芳子 専門領域：科学技術社会学

研究員 東岡 達也 専門領域：高等教育論

客員 Maria Slowey（アイルランド ダブリンシティ大学）

楊 武勳（台湾 国立暨南国際大学）

村澤 昌崇（広島大学高等教育研究開発センター）

両角 亜希子（東京大学大学院教育学研究科）

佐藤 仁（福岡大学人文学部）

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

Tel 052-789-5696

Fax 052-789-5695

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp

URL <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>